

主のしもべとして

(コロサイ3・18～25)

一、テキストをめぐって

3章18節に「**妻たちよ**」、19節に「**夫たちよ**」、20節に「**子どもたちよ**」、21節に「**父たちよ**」、22節に「**奴隷たちよ**」、4章1節に「**主人たちよ**」と呼びかけられています。18節より21節までを見ますと、家庭のことが語られているかのように見えます。ですが、妻、夫、子どもたち、父たちへの呼びかけに続いて22節では「**奴隷たちよ**」とあり、さらに4章1節では「**主人たちよ**」と呼びかけられています。その前の、2章6節より3章17節までは、主イエス・キリストを信じる生活について語られているのに、18節になると「妻たちよ。云々」となります。一見つながっていないようですが、つながっているものとして読む必要があると思います。そのように読むなら、18節以降は、家庭におけるキリスト者の生活について語られているのか、となります。もちろん、そのようにも読めます。その場合、「**妻たちよ**」「**夫たちよ**」「**子どもたちよ**」「**父たちよ**」に続いて、「**奴隷たちよ**」と続いているのがすばらしいと思います。奴隷も家族の一員として受け止められているからです。

ですが私は、そうでない読み方もあ

ると思いました。と言いますのは、コロサイ書を読み進めてまいりますと、3章11節に「**そこには、ギリシア人もユダヤ人もなく、割礼のある者もない者も、未開の人も、スキタイ人も、奴隷も自由人もありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです**。」とあります。パウロが挙げたのは、当時の、それぞれにかなり異なる人たちのことです。と言つことは、その先にあるのは、キリストにあるなら、妻も夫も、子どもも親も、奴隷も主人も同列であるということなのです。これは、当時の常識からするなら、画期的なことでした。そのように読んでまいりますと、18節の「**妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい**。」は、単に、家庭における妻たちへの教えではなく、キリストを信じて、神の前に同列とされた妻、夫、子ども、親、奴隷、主人に呼びかけていることばであると読むこともできます。

二、主のしもべとして

今一度、18節をご覧ください。「**妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい**。」と語られています。「夫に従う」とは、夫のしもべ(奴隷)となることではありません。私共は、男も女もキリストのしもべ(奴隷)です。キリストに仕える者として、人にも仕えるわけ

19節をご覧ください。「**夫たちよ、妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません**。」と語られています。夫とは、すなわち男性です。男性はおおよそ女性よりも体が大きく、骨格も大きく、骨も太く、筋肉もあり、力もあります。何のためでしょうか。それは、妻を守り、家庭を守り、郷土を守るためであると、私は考えます。

20節です。「**子どもたちよ、すべてのことについて両親に従いなさい。それは主に喜ばれることなのです**。」と語られています。親の立場になると、言いにくいことなのですが、「こんな親でごめん」と思います。ですが、それは置いておいて、みことばによれば、どんなに問題がある親であっても、親は親です。キリストのしもべ(奴隷)である意識するなら、子どもたちは親を受け入れなければなりません。もちろん尊敬できる親であるなら、それに越したことはありませんが。

22節を見てまいります。「**奴隷たちよ、すべてのことについて地上の主人に従いなさい。人のこゝろ嫌取りのような、うわべだけの仕え方ではなく、主を恐れつつ、真心から従いなさい**。」とあります。古代社会は奴隷が当たり前に居た社会でした。様々な奴隷がいたことと思われまゝ。非常に頭が良い奴隷、頭は普通でも体力がある奴隷、気が荒い奴隷、温和な奴隷と、主人も様々なであっ

たと思われまゝ。横暴で性格が悪い主人、温厚で奴隷思いの主人と。奴隷がキリストを信じたら——おそらくその場合は、まず主人がキリストを信じなければ、奴隷が自分一人で信じるのはむずかしかったと思われまゝが——、神の前には奴隷も自由人も同列であると知るようになります。その場合に、奴隷の態度は、どういふものがふさわしいでしょうか。それは、キリストのしもべ(奴隷)として、地上の主人に仕えて行くことです。そうするなら、奴隷の主人も主の祝福を共有することになります。

そういうわけで、18節から22節までを、妻たち、夫たち、子どもたち、父たち、奴隷たちに対する個別の教えとしてではなく、「キリストを信じたらこうしなさい」という教えとして聞いたら、何が語られているのかが見えてまいります。それが、23節です。「**何をすることも、人に対してではなく、主に對してするように、心から行いなさい**。」とあります。

皆様。人の奴隷になつてはいけません。私たちは、キリストの奴隷です。あるいはキリストに仕える、キリストのしもべなのです。そして、キリストがそうなさつたように、人に仕える者となります。まさしく私たちは**人に対してではなく、主に對して**、お仕えしているのです。